

●伝統と若者文化共存

大淀川下流の一市六町の広域産業・文化圏の中で、新しいベッド・タウン、キャンパス・タウンとして、注目を集めているのが清武町である。宮崎市の南西部に隣接している地理的条件、宮崎自動車道、宮崎空港とのアクセスや流通に恵まれている利点が、活性化に弾みをつけている。

ここでは戦前から、稲作や園芸作物の栽培が盛んで、県内外に大根、野菜、茶などを出荷している。中でも特産品の「日向夏ミカン」は全国区のブランドとして人気が高い。これを原料にした土産品も評判がよい。

こうした豊かな田園地帯として、発展してきた清武町だが、今その姿が大きく変わりつつある。人口二万九千人を数える清武町には宮崎医科大学、宮崎国際大学、宮崎女子短期大学、宮崎保健福祉専門学校などが相次いで開校し、若者たちでにぎわっている。住民の平均年齢が三十

歳代後半というのもうなずける。

加えて周辺の宮崎大学、宮崎県立看護大学、宮崎産業経営大学とのリンクが、キャンパス・タウンとしての彩りを一層際立たせている。バリアフリーによる学生たちの地域に根差した文化活動と、ユニークな情報発信が各方面から期待されている。

また、海外からの留学生や研究生も多く、現在百人を超えている。彼らは国際交流の推進にも一役買い、こうしたキャンパス風景や若者文化が、町の新しい顔として、風土記のページを塗り替えているのである。

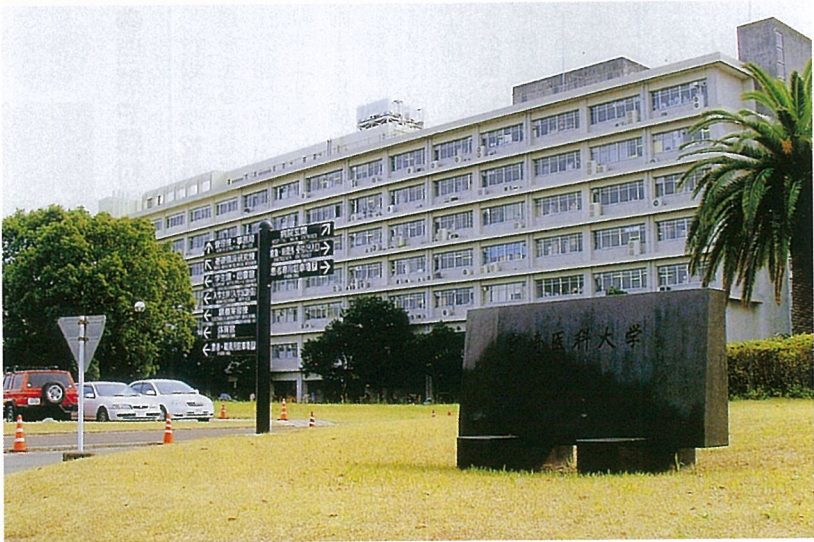
歴史をひもとくと、かつて天領だった船引地区を除き、清武町は飢肥藩の伊東氏によって治められていた。地元の祭り唄に「飢肥の殿様／清武通い」とあるように、飢肥藩との行き来も密であったようだ。伝承される郷土芸能や習俗、

それに清武城などの史跡から、関係の濃さをうかがうことができる。

とりわけ天保二（一八三一）年、藩校である飢肥の「振徳堂」の助教授となった、安井息軒の学問を通しての貢献と交流は特筆される。昨年九月には、その功績を検証する「きよたけ歴史館」が加納地区に完成した。文教の地のシンボルでもある先賢の足跡をしのび、町内外から訪れる人も多い。

農林業に根差した伝統文化と、キャンパスを中心にした若者文化が、どう共存しながら、新しい町づくりを結実させていくか。町の将来には大きな夢が広がっている。

原田 解



町の核として大学に寄せる期待は大きい（写真は宮崎医科大学）